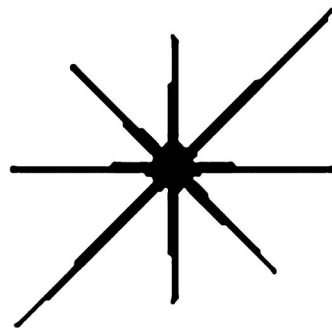


コメット通信 60

[’25 年 7 月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 沓掛良彦の人と仕事】

沓掛先生は二度死ぬ

野村喜和夫—————3

東西古今の人

川合康三—————5

枯れるをまねぶ

近藤昌夫—————7

【特集 沓掛良彦の人と仕事】

沓掛先生は二度死ぬ

野村喜和夫

あれはいつのことだったか、沓掛先生から、一面識もない私に、豪華な造本の『黄金の豎琴——沓掛良彦訳詩選』（思潮社、2015）をご寄贈いただくということがあり、ひたすら恐縮した。しかし、もしこの一冊がなかったら、わが生は西洋古典詩におけるエロスの饗宴を垣間見ることなく終えることになったろう。私は日本文学科の出身で、『万葉集』ほかの秋津島の愛とエロスの発現には多少とも親しんできたが、それと比較しつつたとえば『ギリシア詞華集』を読む喜び。性愛の表現における東西の差も見えてなかなか面白いのである。

それから数年が経って、「午前」という布川鶯さんが主宰する詩誌に寄稿するようになり、その「午前の会」という集まりで沓掛先生に初めてお会いした。そのときにまたいただいたのが、井伊華言『百人一死——詩人たちはいかに死んだか』（水声社、2023）である。なぜ沓掛先生が私に直接手渡されたのか、本を開いてその理由がわかった。あとがきを読むと、「これは詩人たちに読んでもらいたくて書いた本である」と始まり、「ところで全国の詩人のみなさん、どんなふうに死ぬご予定ですか」と締めくくられる。そうか、そんなふうに私は問いを向けられたのだ。『百人一死』で取り上げられた百人の詩人たちは、「殺された詩人たち」「自殺した詩人たち」「刑死した詩人たち」「獄死した詩人たち」「強制収容所で死んだ詩人たち」「流謫のうちに死んだ詩人たち」「戦死した詩人たち」「奇禍によって死んだ詩人たち」「夭折した詩人たち」「野垂れ死にした詩人たち」「幸福に死んだ詩人」に分けられている。さてそこで、どんなふうに死ぬ予定ですか、と問われても、私の場合、だいぶもう選択肢は限られている。殺されたり自殺したりする可能性はきわめて低いし、「刑死」「獄死」「強制収容所」「流謫」「戦死」のあたりはもとより無縁、「夭折」の年齢もはるかに遠ざかった。となれば、「奇禍」か「野垂れ死に」か「幸福に」死ぬか、いずれかであろう。実はどんなふうに死ぬかについて、予定ではなく願望としてなら、以下のように書くことができる。私が理想とする死に方は、映画『ドクトル・ジバゴ』のラスト近く、バスに乗っていた詩人ドクトル・ジバゴが、車窓から一瞬、別れた愛人ナナの姿を認めたような気がして、思わずバスを降り、後を追おうとするのだが、そのとき不意に胸の痛みをおぼえて、路上にうずくまったまま息絶えてしまう、あの死に方だ（ちなみに、パステルナークの原作ではこの場面は書かれていない）。トルサデポアン、心室頻脈、であったのかもしれない。あるとき突然発症して心拍数が乱れ、心臓が機能しなくなって脳への血流が途絶え、意識を失って死亡するという致死性不整脈。ほとんど苦しみはなく、しかもその意識の最後を、なつかしい愛の対象が瞬間よぎるのだ。こうして私の夢見る死は、「奇禍」と「野垂れ死に」の中間のあたりに位置づけられようか。少しかっこ良すぎるかもしれないが、沓掛先生、というか井伊さん、願望なのでお許しください。

『百人一死』にいささかとどまりすぎた。三番目にやはり「午前の会」でいただいたのが、このたびの井伊華言『れそなんていあ——東西古典詩の木魂』（水声社、2025）である。見開きページの右側に沓掛先生による訳詩（西方古代詩および西方中世・ルネッサンス詩の場合）あるいは原文（中国古典詩および日本古典詩歌の場合）が掲げられ、左側にその「れそなんていあ」、つまり井伊さんの、なんと言ったらいいか、注釈、パロディ、批評的感想のようなものが付されている。文句なく楽し

い。テキストは古代ギリシアから江戸狂歌まで、驚くべき守備範囲だが、一貫しているのは、止みがたいエロスへの傾きと途方もない諧謔精神である。この両輪は、一介の現代詩の書き手たる私としても、あらまほしきものとして讃仰したい。

三冊を通しての印象、それは沓掛先生は二度死ぬ、ということだ。一度目は西洋古典研究の碩学としての沓掛良彦を自ら葬り（じっさい、『黄金の豎琴』のまえがきには「紙の墓碑」とある）、その遺産の上に、戯号井伊華言として今二度目の生を生きておられる。『閑吟集』の一節をもじった井伊さんの「れそなんていあ」をそのまま借りれば、「何せうぞ くすんで 末期はそこよ ただ狂へ」という生である。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人。小社刊行の主な著書に『風の配分』（1999年）、『[シュルレアリスムへの旅](#)』（2022年）、『[観音移動](#)』（2024年）などがある。

【特集 沓掛良彦の人と仕事】

東西古今の人

川合康三

「今 ^{きゆう}丘や、東西南北の人なり」(『礼記』檀弓篇上)——孔子(名は丘)は自分を天下の各地をせわしく動き回る、定处なき人であると規定する。ここには魯の国に限定されない広い範囲を行動するという自負よりも、寄る辺なく漂泊する生涯を定めと受け入れた悲哀が漂っている。空間を語るこの語に時間も加えて、沓掛良彦氏を「東西古今の人」と呼びたい。氏をして氏たらしめている何よりの特質は、西洋東洋に跨がり、古代から近代に至る広大さにあるからだ。

かつては日本にもそういう知識人がいた。彼らは幼少のころから漢学の素養を身につけ、長じて西欧の思想・文学を吸収したから、おのずと東西と古今を身に着けることができた。しかし漢学が日本人から遠ざかり、且つまたあらゆる面で専門化・分化が進んだ今、沓掛氏のような存在は希有と言わねばならない。

polyglot と詩人とはなぜか必ずしも一致しない。多言語を自在に操る人の能力と、詩を楽しむ感性とは、同一の場に働かないらしい。ところが、これまた希有なことに、氏はその双方を兼ねるのだ。

わたしは思わず「詩を楽しむ感性」と書いた。そう、これまた特記すべきは、氏は古今東西の詩を涉猟し、正確で味わい深い翻訳をものするのみならず、なにより特筆大書すべきは、氏の詩を愛する心があまたの人々と一線を画することである。

非凡な語学力を手立てに、地球上で人々が生み出してきた詩篇の数々に読み耽る快樂、これこそ理想的な文人の姿にほかならない。このような文人が今の世にも存在し、そんな人と同時代に生きることのできた自分は幸運だと思う。

空言を並べるのは止めて、東西古今の人の実例を見よう。氏は傘寿を超えても毎年のように新しい本を出されているが、最も新しく刊行された(と思うけれど、そのあとさらに新刊があるかも知れぬ)『恍惚惨人詩話 カスタリアの泉に汲んで——古典詩の記憶から』(思潮社、2025年4月3日)、そのなかに収められた「心惹かれた女性詩人たち——一〇の小さな頌詞」、その一篇「魚玄機」には、士人との恋に破れ、中国では珍しい、実体験に基づいた恋の詩をのこしている妓女魚玄機を、凡庸な詩人に棄てられて自分の詩を生み出したフランスの詩人ルイーゼ・ラベと重ね合わせる。「和泉式部」の章ではさらに拡げて、サッフォー、ルイーゼ・ラベ、魚玄機、和泉式部という女性詩人たちを一つの場に置き、その交じり合う響きを語る。これこそ「世界文学」と称すべきものだろうか。挙げられた女性詩人についても、氏にはそれぞれ専著がある。『サッフォー——詩と生涯』(平凡社、1988)、『焔の女——ルイーゼ・ラベの詩と生涯』(書肆風の薔薇、1988)、『和泉式部幻想』(岩波書店、2009)。

ただ危惧するのは、人間の長い文化が生み出してきた、高度に洗練された文人の形象、それも氏が最後なのではないか、ということだ。今、文化のなかで詩や文学の占める場が著しく小さくなっている。事柄は好まれても、言葉そのものへの愛着が忘れられていく。「文学」は文化のなかで急速に薄れていくように見える。これは時代の変化がもたらした、必然的な趨勢なのだろうか。世の中全般の傾向についてはさておき、自分の領域に限ってみても、対象は中国古典文学なのに、文学性への関心はまるでない。作品そのものを語ることは避けて、「研究」と称する周辺の作業に淡々と勤しむ。先に記した、詩を愛し、詩を楽しむなどといった詩との関わりは、避けられ、排除され、無視され、軽

蔑される。時には「文学好き」な人も出現するけれども、言葉に溺れ、こじやれた言い回しに酔っているのが、かえって痛々しい。文学を避けるのも「文学ぶる」のも、文学そのものの衰頽がもたらしたものだと思う。そういう時代だからこそ、沓掛氏のような存在が重い意味を持つはずなのに。

執筆者について——

川合康三（かわいこうぞう） 1948年生まれ。京都大学名誉教授。専攻＝中国文学。主な著書に『中国の詩学』（研文出版，2022年），主な訳書に『曹操・曹丕・曹植詩文選』（編訳，岩波書店，2022年）などがある。

【特集 沓掛良彦の人と仕事】

枯れるをまねぶ

近藤昌夫

かつて、東京都北区西ヶ原の墓地の外れに、一軒の酒場があった。そこでしばしばひらかれていた、文学を尊び、自ら陶冶する神人交歓の宴で「れそなんていあ」は産声をあげた。その酒場は祭司の名を冠して「沓掛研究室」と呼ばれていた。暖簾はかかっていなかった。

井伊華言こと沓掛良彦先生は、東京外国語大学に赴任された1987年に「ロシア文化特殊研究Ⅱ」をご担当された。ゴレニシチェフ＝クトゥーゾフの論文「ロシアにおけるダンテ」の購読の授業であったが、ゴーゴリからブローク、ブリュースフに至る、ダンテの受容史に、先生の該博な知識と知見が加わって不肖「元學生」は目から鱗の連続であった。先生がクトゥーゾフの論文を縦糸に用いられたのは、恩師のおひとり木村彰一先生の教え——西欧古典文学知らずしてロシア文学はわからない——を伝授するためであった。

その翌年、先生の「比較文学」を履修した「元學生」は、クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』で修辞学の伝統を学び、ここでも綺羅星の如き詩人たちの世界に広く触れる贅沢を味わい、またその翌年も「比較文学」を履修したのであった。同一科目を二度も聴講したのは落第したわけでも、また、西欧古典文学の魅力に開眼し、宗旨がえしたわけでもなかった。それは、ずらりと書架に並んだ酒瓶の意義をまだ十分に汲み尽くしていないと思ったからなのである。酒を飲めば文学の奥義に一步でも二歩でも近づける、学問には千鳥足こそふさわしいとは、はたして真説なのか。酔うほどにこの素朴な疑問が膨らみ、麦酒片手の阿波踊りに興じた「元泡沫學生」は、疑問解明のためにいわゆる常連さんになったのである。

そんなことは杞憂に過ぎなかった。「沓掛研究室」では、「酒任教授」の目眩く文学のお話とアルコールがカクテル光線を放ち、論文執筆の地獄から東の間煉獄へと誘われた「飲生」たちが、スピリッツで浄化され、次々と巣立っていったのである。所狭しと並ぶ酒瓶は、恩師木村彰一先生の信念——「学問は酒で磨かないことには光が出てこない」——すなわち学酒合一道の真髓を何より雄弁に物語っていたのである。

そればかりではない。沓掛先生は、彷徨える「飲生」の「退院」後の身の振り方も案じられ、手ずから論集まで編集・刊行してくださった。これも師道実践の一環であったことは、雑誌が「ALBA(曙光)」と命名されたことに如実にあらわれていた。

この有り難き、学酒合一なる恩寵の光は、今でもまだこの国のどこかで明滅している。たとえば、頭皮でいち早く雨粒を感知できるようになった「元飲生」の耳元にも晩酌の折りなどに木霊が届くことがある。

酒飲めば地金出るなり放浪児
古い毛や買わず留め置きあでらんす

はて、これはいよいよ学酒合一道の発光かとほくそ笑み、二度三度と放吟してみる。にんまりして家人に目をやると、笑顔のはずが曇っている。そうか、確かになんとも下品で暗くてみみっちい。た

たとえば先生の「れそなんていあ」——「鼻の色は移りにけりな赤色に我が身忘れて酒呑みしまに」——に漲る生气も陽気さもなければ、気品も微塵もない。いったいそれらの原点はどこにあるのだろう。

プーチンの戦争が始まって間もなく、お電話を頂戴した。抗議のために大使館前に押しかけた、次回は「ニェット・ヴァイネ(戦争反対)！」と「ダロイ・プーチナ(打倒プーチン)！」のプラカードを掲げようと思う、ロシア語の綴りはこれでよかったか、とのお尋ねだった。受話器の向こうの張りのある声に気押され、学生運動盛んなりし昔のお話を思い出した。先生のエネルギーなお仕事の中でも特に枯骨閑人、恍惚惨人、茂原才欠、小湖津完爾、そして井伊華言が奏でる豎琴の音色は、青春の変奏なのではないか……。

その日の晩酌でまた幽けき木霊が聞こえてきた。

枯るるとは青春の炎絶えずして熾火の醸す詩酒の言なり

この腰折れが何かの折に「枯骨閑人」いや「虎骨寛仁」先生の目に触れ、「尻句」にすうっと赤い線を入れ「師匠のげんなり」とでもあらためてくださったらこれほど喜ばしいことはない。だが安手の藝が枯れ、免許皆伝を迎えられる日はまだだいふ先のことだろう。

執筆者について——

近藤昌夫（こんどうまさお） 1956年生まれ。現在、関西大学教授。専攻＝ロシア文学。小社刊行の主な著書に『[ロシアの物語空間](#)』（共著、2017年）、『[ペテルブルク神話と文学のコロムナ](#)』（2023年）などがある。

沓掛良彦の本

百人一死——詩人たちはいかに死んだか 井伊華言 4500 円
れそなんていあ——東西古典詩の木魂 井伊華言 3000 円

*

ピエリアの薔薇——ギリシア詞華集選 沓掛良彦訳詩集 5000 円
焰の女——ルイーゼ・ラベの詩と生涯 2500 円
サッフォー——詩と生涯 6000 円
エロスの祭司——評伝ピエール・ルイス 6000 円
ブリティスの歌 ピエール・ルイス 沓掛訳 6000 円

*

ボードレール伝 アンリ・トロワイヤ 沓掛・中島淑恵訳 4000 円
ヴェルレーヌ伝 アンリ・トロワイヤ 沓掛・中島淑恵訳 5000 円
愛の女神——アプロディテの姿を追って ジェフリー・グリグスン 沓掛・榎本武文訳 3500 円
ラフマニノフの思い出 A・ゴリデンヴェイゼル他 沓掛監訳 平野恵美子・前田ひろみ訳 4500 円

[価格税別]

水声社の新刊

(2025 / 7 / 31)

【8月の新刊（予定）】

フォレンジック・アーキテクチャー

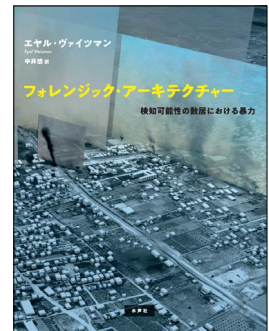
——検知可能性の敷居における暴力

エヤル・ヴァイツマン 中井悠訳

【8.26 発売】

▶パレスチナ紛争をはじめとした国家が引き起こす暴力を究明すべく、さまざまな記録・記憶・痕跡から見出した証拠を繋ぎ合わせ、責任の所在を浮かび上がらせる、斬新な調査手法「フォレンジック・アーキテクチャー」の実践を記録したパフォーマンスの断章。

B5 変型判上製 / 362 頁 / 7200 円＋税 ISBN : 978-4-8010-0871-7



戦後初期日本の アートとエンゲージメント

ジャスティン・ジェスティ 山本浩貴訳

【8.27 発売】

▶1950年代、ルポルタージュ芸術から九州派、創造美術協会まで、創作活動は社会運動と深く結びついていた。特権的なものに抗い、新たな価値体系を樹立せんとした社会関与的な芸術のネットワークを辿り、未だ汲みつくされないことのない芸術＝社会的実践の可能性に光をあてる。

A5 判上製 / 480 頁 / 6000 円＋税 ISBN : 978-4-8010-0875-5



【7月の新刊（既刊）】

ジョージ・オーウェル『一九八四年』の現在地

——文学・思想・メディアの交差点

ネイサン・ウォデル編 近藤直樹＋福西由実子＋大木ゆみ監訳

佐藤義夫＋高橋一馬＋中村麻美＋前津朋子＋渡辺浩訳

【7.29 発売】

▶オーウェル没後七十余年、権威主義が新たな力を得る混迷の現代に、改めて『一九八四年』に焦点をあて、この小説の意義について歴史、教育、難民、独裁、労働、音楽、映画、漫画、ゲームなど多面的な視座から論じた最新論文集。

A5 判上製 / 456 頁 / 7000 円＋税 ISBN : 978-4-8010-0880-9



スペイン文明論集Ⅰ [文学・言語篇]

アメリコ・カストロ 本田誠二編訳

【7.29 発売】

▶セルバンテス、ロペ・デ・ベーガ、サンタ・テレーサ……西欧文明とイスラーム文明の狭間で育まれた〈スペイン性〉の輝きを、黄金世紀文学や神秘主義的著作の精読を通じて描き出す、二十世紀スペイン屈指の歴史家＝文芸批評家の本邦初訳の論文を集成。

A5 判上製／664 頁／10000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0842-7



スペイン文明論集Ⅱ [歴史・文化篇]

アメリコ・カストロ 本田誠二編訳

【7.29 発売】

▶〈衰退するスペイン〉への危機意識のもと、スペイン民族の核心を把握し直すべく、キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒の共存と対立という特異な環境の下で編まれたスペインの歴史・文化を、独自の視点から解明する論文を集成。

A5 判上製／740 頁／10000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0843-4



ギルウヘパの懐剣——ツタンカーメンとその系譜

瀧脇千恵子

【7.29 発売】

▶ミタンニ王国から贈られた懐剣の謎をさぐり、政略婚を通じて確固たる地位を築くアメンヘテプ三世、アテン神信仰のアケナテン、黄金のマスクで知られるツタンカーメンら第十八王朝のファラオをとりまく王妃、側室、神官、官吏の人間模様を生き生きと描く歴史小説。

四六判上製／280 頁＋カラー別丁 4 頁／2800 円＋税 ISBN：978-4-8010-0854-0



水声社

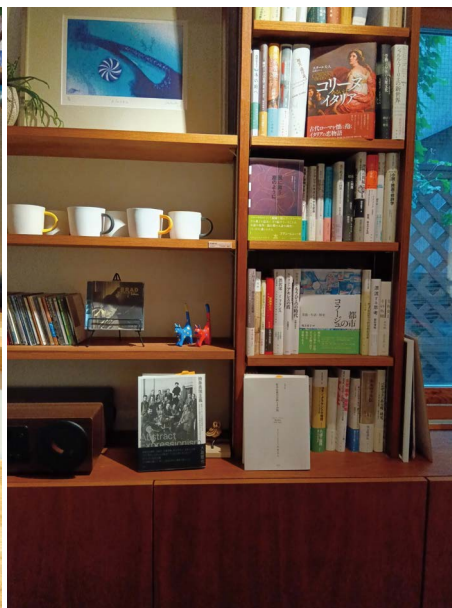
東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭
le Jardin des livres

本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』は本格的な夏となりました。トンボや夏蝶も訪れます。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭と並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1-22-16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日は12時開店です。

営業日：木・金・土・日

8月は18日より27日まで夏季休業いたします。（詳しくはInstagramをご確認ください。）

TEL：070-4171-0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭
le Jardin des livres

(広告)